

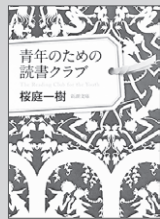
# 青年のための 読書クラブ

学校というのは閉ざされた空間だ。普段一緒にいる友達、部活の同級生、先輩・後輩、教師、ちょっと用事がある時だけ話しかけるくらいの相手。学生の間関係のほとんどは学校の中で完結する。そして、閉鎖されているからこそ、学校の中での交流は濃密で深いものとなる。次代へと受け継がれていく学校の閉鎖性とそこでの人間関係を、少し離れた視点から乾いた文体で描いたのが今回紹介する小説『青年のための読書クラブ』である。

舞台となるのは名門高校、聖マリアナ女学園。女学園創設から現代に至るまでの間に学園で発生した珍事件と「読書クラブ」というクラブ活動との関わりが物語の中心となる。「読書クラブ」は学園の中でも特異な地位を築いている。普段は決して表に出ない、引込み思案の少女たちが自然と集まる文化系クラブ。けれど、学園の歴史が動くような大きな事件が起きた時だけ、誰にも知られずこっそりと中心となって活動する。そして、その事件の一部始終をクラブの日記に書き残し、後世へと伝えていく。

連作短編である本作では五つの事件が描かれる。どの事件も学園の外からでは、あるいは「大人」の視点からすれば小さく他愛ないものに見える。けれど、学園の中なかににいる少女たちにとっては人生をその根底から揺るがしかねない大きな事件だ。事件に対峙した少女たちの勝利も敗北も、外に表れる関係も内に隠した感情も、すべて歴史として描かれ、「読書クラブ」の中だけに伝えられる。閉鎖された空間の中で歴史となっていく少女たちの姿は生々しく鮮烈な印象を残す。

嫉妬、羨望、焦燥感、何者でもない自分へのいら立ち。時代や学校の在り方とともに、少女たちの生き方も移ろう。けれど、そんな中でも変わらず、閉じ込められるものがある。閉鎖性から浮かび上がる景色には残酷はかなな儚さが秘められている。



『青年のための  
読書クラブ』

著者：桜庭一樹  
出版社：新潮文庫  
価格：473円（税込）